

高温に対する今後の農作物の栽培管理について

令和4年(2022年)4月7日

農業技術課

【作物】

1 水 稻

種子予措から育苗での高温は次のような影響があるため、管理に注意する。

- (1) 浸種では発芽の不斉一、催芽ではもみ枯細菌病の発生助長につながるため、日射により水温上昇とならない場所で作業する。
- (2) 平置き方式による出芽では立枯性病害やもみ枯細菌病の発生助長、緑化期以降は徒長苗やヤケ症状につながるため、被覆資材の除去、ハウスやトンネルの被覆資材の開閉により温度管理を徹底する。

2 麦 類

- (1) 現在の麦の生育進度は、適期播種された麦は数日の前進から平年並み、播種が遅れた麦は数日の遅れと、播種期によって生育に差がある。
- (2) 特に適期播種された麦は、出穂期や開花期の前進に備え、追肥作業や開花期防除作業の準備を進め、適期を逃さないように実施する。

【果樹】

1 生育状況

- (1) 果樹試験場(須坂市)の「ふじ」の発芽は3月31日で平年より1日遅い。「川中島白桃」の発芽は4月4日で平年より5日遅い。
また、南信農業試験場の日本ナシ「南水」の発芽は4月4日で平年より2日遅い発芽である。
- (2) 今後の高温により、開花が早まると予想される。

2 今後の管理

- (1) 病虫害防除
発芽期以降の生育ステージは早くなることが予想されるので、防除が遅れないように準備する。
- (2) かん水
乾燥が続く場合はかん水を行う。なお、稲わらなどのマルチは当面は行わず、晩霜害の危険がなくなってから敷く。
- (3) 人工受粉
生育が早まると、開花と訪花昆虫の活動時期がずれて結実不良を起こすことがあるので、人工受粉を励行する。人工受粉に必要な採花や開葯作業は遅れないように注意する。
なし、核果類(もも、すもも、おうとう等)では、生育が早まると開花時期の品種間差が小さくなり、受粉作業が集中する。限定受粉の実施など、効率的な作業を行うよう注意する。
開花期間中に凍霜害があった場合は、被害が軽微な花や遅れ花に受粉を行う。

3 凍霜害対策

生育が前進し、凍霜害のリスクが高まるため、防霜ファンの点検、燃焼資材の準備等を行う。

【野菜】

1 育苗管理

- (1) 高温が続いた場合は苗の生育が進み、軟弱徒長したり、老化しやすくなるので、ハウスやトンネル被覆の換気を適切に行い、適正な温度管理に努める。また、高温時の乾燥によ

る萎れに注意するとともに、過度なかん水も苗の軟弱徒長や病害の発生を助長するので、こまめな栽培管理を徹底する。

- (2) アブラムシやアザミウマ類等の発生が早くなることが予想されるので、害虫の発生状況に留意し、育苗期後半から定植時の害虫防除を励行する。また、ハウス内の雑草は害虫の発生源となるので、除草に努める。
- (3) 高温下で軟弱徒長した苗は、定植後に低温障害や凍霜害を受けやすいので、低温管理による順化を十分に行ってから定植する。
- (4) 苗の生育が進むことが予想されるので、定植遅れが生じないように、ほ場の準備を計画的に進める。

2 果菜類（施設）

- (1) 高温により生育が進み、軟弱徒長しやすくなるので、ハウス内の換気や循環扇を利用し、適正な温度管理に努める。また、過度なかん水も苗の軟弱徒長や病害の発生を助長するので、こまめな栽培管理を徹底する。
- (2) トマト・キュウリなどのハウス半促成（加温）栽培や夏秋イチゴでは、アブラムシやアザミウマ類等の発生が早くなることが予想されるので、害虫の発生状況に留意し、適期防除に努める。また、ハウス内の雑草は害虫の発生源となるので、除草に努める。

3 アスパラガス

- (1) 半促成栽培ではハウスの換気を適切に行い、適正な温度管理に努める。換気に伴いハウス内の土壌が乾燥するので、かん水が可能なほ場では20～30 mm程度のかん水を実施する（かん水間隔の目安：2～3日に1回。かん水は晴天日の日中に行うことを基本とする）。
- (2) 露地栽培では萌芽が早まり、春先に凍霜害に遭う危険性が高くなる。凍霜害が予想される場合はべた掛けまたはトンネル被覆を行う。

【花き】

1 育苗管理

春定植を行う品目では、苗の生育が進み老化しやすくなるので、ハウス内の換気を励行するなど温度管理に注意し、生育のコントロールに努める。

高温下で軟弱徒長した苗は定植後に低温障害や凍霜害を受けやすいので、低温管理による順化を十分に行ってから定植する。

2 定植管理

気温が高い日中に定植を行うと苗が萎れやすくなるため、できるだけ涼しい時間帯に行う。また、気温が高い時に定植を行う場合や定植後、高温が予想される時は、ハウス内の温度を下げ、こまめなかん水を行い、寒冷紗等を被覆して葉焼けや苗（株）の萎れを防ぐ。

3 施設花きの温度管理

日中、高温になりやすいため、トンネル、カーテン等の開放時間が遅くならないように注意し、十分な換気を行う。一方、晴天時の早朝や夜間は気温が低下しやすいため、保温管理を徹底し、定植後の活着不良や生育障害を防ぐ。

4 露地品目の凍霜害対策

シャクヤク、シンテツポウユリ、リンドウ等では萌芽及び生育が早まり、凍霜害に遭う危険性が高くなる。凍霜害が予想される場合はベタ掛けまたはトンネル被覆を行う。

5 病虫害対策

アブラムシ類等害虫の発生が早くなることが予想されるので、密度が低いうちに防除を徹底する。また、灰色かび病やキク白さび病等、病害の発生にも注意し、早めの防除を行う。

6 夏秋ギクの母株管理

日中、高温とならないように十分な換気を行う。摘心及び採穂は、芽が伸びすぎないうちに、早めに行う。摘心は採穂時期を考えて計画的に行う。採穂時期が早まった場合は、挿し芽適期まで挿し穂を冷蔵庫で貯蔵する。